

琉球大学学術リポジトリ

「知のふるさと納税」を通じた離島支援プロジェクトの効果の検討

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学生涯学習教育研究センター 公開日: 2011-08-18 キーワード (Ja): 知のふるさと納税, 離島支援, 地域貢献, 生涯学習, 学力, 進学率 キーワード (En): 作成者: 山田, 美都雄, 西本, 裕輝, Yamada, Mitsuo, Nishimoto, Hiroki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/21650

「知のふるさと納税」を通した 離島支援プロジェクトの効果の検討

Study of the Effect of the Project which Supports a Detached Island in Okinawa -Hometown Tax in Knowledge-

山田美都雄¹・西本 裕輝²

キーワード：知のふるさと納税、離島支援、地域貢献、生涯学習、学力、進学率

I. はじめに

「離島支援プロジェクト『知のふるさと納税』」は、琉球大学平成22年度中期計画達成プロジェクト経費の予算配分を受け、地域貢献の一貫として、生涯学習教育研究センターと大学教育センターが共同で取り組んでいるプロジェクトである。

ここでいう「離島支援」とは、多くの島々を含む沖縄県の特徴を鑑み、主に宮古・八重山地域を対象として、初等中等教育及び社会教育の観点から教育上の支援を行っていくことを示す。具体的には後ほど詳細に触れるが、離島小中高校及び公民館等への大学教員の派遣、大学生の派遣という活動が挙げられる。

また「知のふるさと納税」とは、知識版ふるさと納税とも言えるもので、離島出身の大学教員等が、地元における講演会などを通して、初等中等教育及び社会教育活動に関わる中で、知をもってふるさとに貢献する活動を示している。

このように本プロジェクトは、地域貢献という要素を強く持っている。つまり琉大の有する人的資源や知的資源を用いて地域（主に離島）に還元するというのが第一の目的と言ってよい。

一方、本プロジェクトにはもう一つの目的がある。離島の子どもに焦点を当てた場合、その学習環境は必ずしも恵まれているとは言えない。例えば、大学進学率で言うと、沖縄本島内の進学高校の大学進学率が、軒並み80%～90%台に達しているのに対して、離島地域の進学校の大学進学率はそれを大きく下回っている。また、小中学校段階における学力も、全国最下位の沖縄県の平均学力よりもさらに低い地域が多い。本プロジェクトは、琉大の教員や学生が地元の児童・生徒と関わりを持つことにより、双方に刺激し合い、学力向上、学習意欲向上、進学率向上に寄与することを目的としている。

上記二つの目的を有しつつ、後にふれるように、本プロジェクトは多くのプログラムを提供しており、その内容も多岐にわたっている。しかし、その共通点としては、各地区・地域の出身者が主体となっている点である。

¹ 琉球大学大学教育センター研究員

² 琉球大学大学教育センター准教授

そうしたことも踏まえながら、ここでは22年度を取組を概観しつつ、受講者等を対象とした質問紙調査によって得られた調査データの統計学的分析により、本プロジェクトの効果を検討する。

II. 本プロジェクトの概要

本章では、今回宮古・八重山地域で行われた「知のふるさと納税」プロジェクトの事業の概要について説明する。各地区のプロジェクトの具体的内容について触れる前に、ここではまず、本プロジェクト全体のタイムスケジュールについて確認しておきたい。

表1に示したように、八重山では、昼の部に中学校、夜の部に当該地区の公民館で公開講座を開催した。宮古では、連泊の日程で組まれていることから、午前中に学校を訪問し、午後まで学校で交流を行うなどして滞在することもあった。各会場での滞在時間は、八重山では、中学校と公民館での開催時間に大差はないが、宮古では明らかに小学校での滞在時間がもっとも多く、次いで中学校、高校という順であった。

以下、各プロジェクトの主旨、概要および活動内容について触れる。

表1 宮古・八重山両プロジェクトのタイムスケジュール表

八重山地区				宮古地区			
2/16 (Wed)	2/25 (Fri)	2/27 (Sun)	2/28 (Mon)	3/1 (Tue)	3/2 (Wed)		
7:00							7:00
8:00							8:00
9:00			「A小1年生4クラスとの交流」(学生4名)			「A高校・進路学習相談会1、2年生各7クラス」(学生6名)	9:00
10:00							10:00
11:00			「C中2年生5クラスとの交流」(学生10名)			「B高校・進路・学習相談会1、2年生各2クラス」(学生4名)	11:00
12:00			「C中3年生5クラスとの交流」(学生4名)				12:00
13:00			給食・昼休みをC中の生徒と共に過ごす	「B小学校、5年生1クラス、3年生3クラスとの交流」(学生4名)		「D小学校交流会1・2年生、3・4年生、6年生全3クラスとの交流」(学生6名)	13:00
14:00							14:00
15:00	「学びのすすめ～サイエンスを学ぶ意義と醍醐味」(山口)	「人生の転機について～私の履歴書をもとに語る」(東盛)	放課後子ども教室・交流会への参加(低学年が主な小学生対象)	「C中1年生5クラスとの交流」(学生4名)			15:00
16:00							16:00
17:00	「話しことばの実験室」(高良)						17:00
18:00	「環境問題の捉え方と取り組み方」(山口)						18:00
19:00							19:00
20:00							20:00
21:00							21:00
22:00							22:00

Ⅱ－１．八重山プロジェクト

(1) 八重山プロジェクトの主旨

周知のように、沖縄県の離島においては、高等教育機関としての大学が存在しない。したがって、この地区に住む人々にとっては、沖縄本島に比して、どうしても大学に属する知識人との接触頻度が相対的に低くなってしまいうことは、容易に想像がつくであろう。しかし、このことは、離島に住む人々が大学という存在に興味を持たないということの意味しているわけではない。そこには地理的要因という大きな阻害要因が横たわっているのであり、それゆえ潜在的欲求が刺激されにくいという状況が抱え込まれているものと推測される。本プロジェクトは、このような地域課題を見据え、先述のように当該離島地区出身の研究者が、その地区の人々と専門的な知を通じた接触を行うことによって、知を地域へ還元し、同時に地域住民の大学に対する潜在欲求を呼び起こさせるという目的で取り組んでいる。

(2) 八重山プロジェクトの概要

表２は、今回の八重山プロジェクトの概要についてまとめたものである。この表には、八重山地域で２日に分けて行われた公開講座について、実施日、実施地区、会場、講師名、専門領域、講演題目、対象者そして参加人数といった情報を記載している。八重山プロジェクトでは、講師として、ともにかつて琉球大学で教鞭をとられていた山口喜七郎氏（2008年３月退官）と東盛良夫氏（1996年３月退官）を迎え、両講師のそれぞれの出身字である字A、字Bにおいて、中学２年生および市民の方々を対象にした公開講座を開催した。なお、上記講師２名に加え、同じく八重山出身であり、琉球大学大学教育センター長の高良富夫氏も講演を行った。今回の両講座の内容は、表中の題目に示してあるように、両講師の専門領域に準じた内容が盛り込まれたが、自身の人生や教育観、幼き頃の境遇についての内容が含まれることもあった。

表２ 八重山プロジェクトの概要一覧表

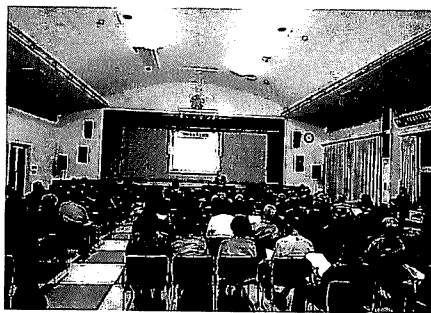
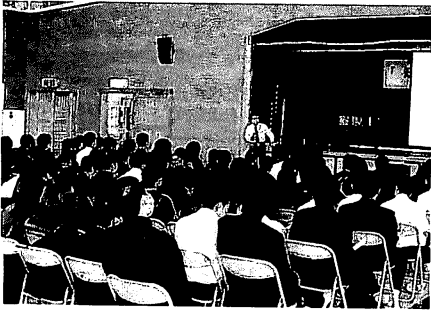
実施日(地区)	2/16(石垣市字A)		2/25(石垣市字B)	
会場	A中学校体育館	A公民館	B中学校体育館	B公民館
講師名(専門)	山口喜七郎 (専門:理科教育)	高良富夫 (専門:情報工学) 山口喜七郎	東盛良夫 (専門:電気工学)	高良富夫 東盛良夫
題目	「学びのすすめ～サイエンスを学ぶ意義と醍醐味～」	「話しことばの実験室」 「環境問題の捉え方と取り組み方」	「人生の転機について～私の履歴書をもとに語る」	「話しことばの実験室」 「人生を悔いなく生きる渡世術」
対象者	A中学校2年生	A地区の方々	B中学校2年生	B地区の方々
参加人数	218名	約70名	103名	約70名

(3) 八重山プロジェクトの活動内容～東盛氏による公開講座

八重山地域では、前述のように字A、Bの２つの地区の中学校と公民館にて公開講座が行われたが、ここでは、紙幅の都合上、字Bにて行われた東盛氏の講演について触れる。

東盛氏の講演の前半部は、自身の戦争経験や親兄弟の死などにより、天涯孤独の境遇へ追いやられたという生い立ちから始まり、やがて契約学生として神奈川の大学へ入学を果たし、研究の道へと進み、そして伴侶を得ることで天涯孤独が解消されたという、想像するだけでも実に激動であったことが伝わるものであった。講演の後半では、バラモンの塔という事例から数学の奥深さについて語られ、最後には人生の渡世術を述べられた。

B中学校における講演の終了後、生徒からの質問を受ける時間が用意されており、生徒からは幸せを感じたときはいつか、研究者の給与はいくらかといった率直な質問が寄せられ、東盛氏はそれら一つ一つに丁寧に回答し、人生や研究に関するご自身の考えを分かりやすく説明した。



Ⅱ－２．宮古プロジェクト

(1) 宮古プロジェクトの主旨

離島の子どもたちは、本島内の子どもたちと違って、身近に大学生がいないため、大学生と触れ合う機会が極端に少ないと思われる。一方、早い段階で将来の目標を持ち、将来展望を持つことが学習意欲を高め、学力向上に繋がること多くの研究からわかっている。例えば西本（2008）では、身近に大学生というモデルがいることによって刺激を受け、子どもの学力が高くなる傾向があることが明らかになっている。また、最近のキャリア教育でも、早い段階、例えば中学生段階で、将来の職業選択のヒントとなるようなプログラムを提供しているものが多い。離島の子どもたちの進学率や学力が低いのは、こうした刺激、すなわち大学生を身近に感じることににより受ける様々な刺激が少ないことも一つの原因と考えられる。

そこで本プロジェクトでは、小中学生のうちに大学生（琉球大学生）と触れ合う機会を持たせることにより、少なくとも大学進学が一つの選択肢となり、結果として学力向上や進学率の向上につなげることを目的としている。具体的には、宮古地域に位置するA高校・B高校出身の大学生が宮古島の小中高を訪問し、子どもたちと触れ合う機会を持つという取組である。

実は地元出身の大学生と触れ合うというところがポイントである。一般の大学生であれば焦点がぼやけてしまい、今ひとつリアリティが感じられないかもしれない。しかし地元出身の大学生であれば、身近に感じることができ、「頑張れば自分もできるかもしれない」という根拠にもなり得るだろう。

(2) 宮古プロジェクトの概要

宮古プロジェクトは、八重山プロジェクトのような大学教員が講演を行う形式とは異なり、宮古地域出身の学生が主体となって、小中高という各学校段階の児童・生徒とともに活動を行うものであった。その概要をまとめたものが、表3である。宮古地域では、4日間にわたる日程で小学校4校、中学校2校、高校2校を、学生10名が分担して回った¹⁾。学生らは、小中学校では、主に担任の授業を補佐することを通して児童・生徒と交流し、また高校においては進路相談会を開き、生徒の相談を受けた。

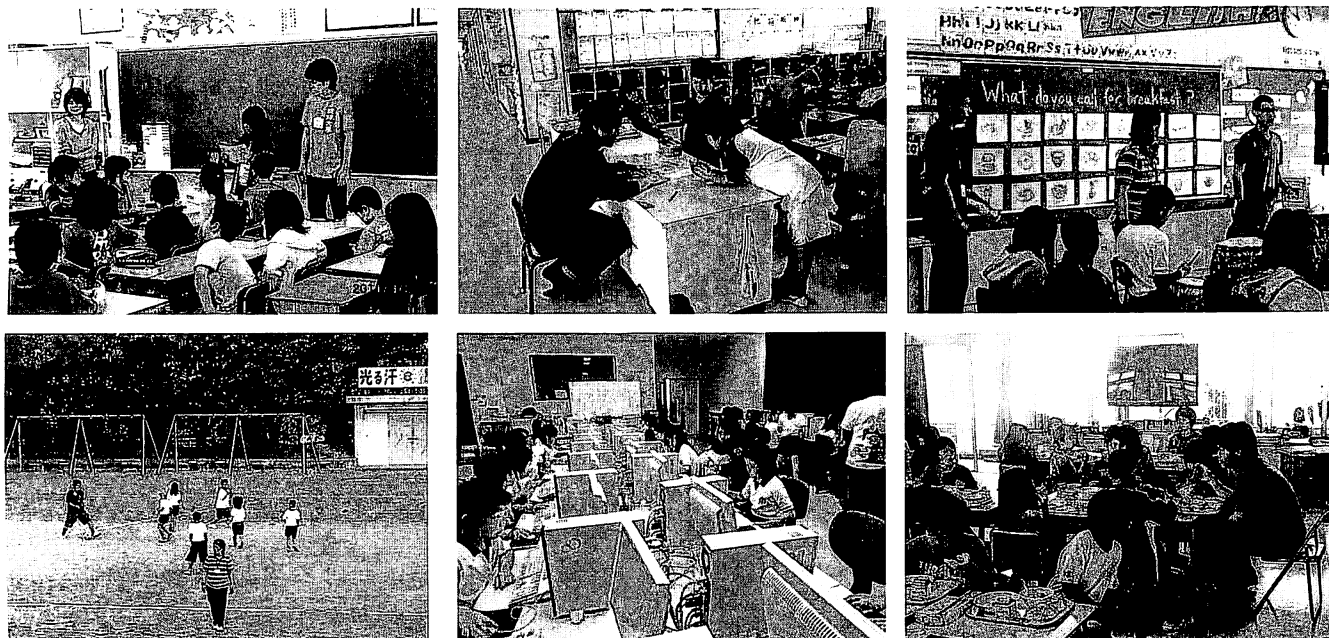
表3 宮古プロジェクトの概要一覧表

実施日	2/27	2/28		3/1			3/2		
会場	中央公民館	A小	C中	B小	C小	D中	A高	B高	D小
事業内容	放課後子ども教室・交流会	児童との交流	生徒との交流 進路相談会	児童との交流	児童との交流	生徒との交流	進路相談会	進路相談会	児童との交流
対象者数	約150名	571名	531名 進路相談会：19名	140名	159名	80名	562名	106名	16名
参加学生数	10名	4名	10名	4名	6名		6名	4名	6名
対象学年と対象クラス数	主に小学校低学年が対象	1年生4クラス	1年生5クラス 2年生5クラス 3年生5クラス	3年生3クラス 5年生1クラス	1年生1クラス 2年生1クラス 3年生1クラス 4年生1クラス 5年生1クラス 6年生1クラス	1年生1クラス 2年生1クラス 3年生1クラス	1年生7クラス 2年生7クラス	1年生2クラス 2年生2クラス	1・2年生複合1クラス 3・4年生複合1クラス 6年生1クラス

(3) 宮古プロジェクトの活動内容～B小訪問

表1、3にもあるように、宮古地域では、A小学校、B小学校、C小学校、D小学校、C中学校、D中学校、A高校、B高校の8箇所を訪問した。これらすべてについて詳述することはできないので、B小での取組について概観したい。

B小には4名の大学生が訪れ、子どもたちとの交流をはかった。大学生は主に授業の補助という立場で、給食を挟んで一日を過ごした（写真参照）。



引率したスタッフは、その間、校長と懇談を行った。その中で今後の展望に関する意見交換が行われたのでここで紹介しておきたい。

校長は、本プロジェクトの趣旨を深く理解してくださり、一過性に終わることなく、ぜひ継続してほしいとの意見をくださった。

共通認識とできたのは、小学生にとって、とてもよい刺激になるということである。前述したが、宮古の小学生は、大学生と触れ合う機会がほとんどない。小学生という早い段階で触れ合うことにより、職業選択や進路選択のきっかけとできればと考えている。

ただ、現行のやり方よりも、さらに低コストで気軽に触れ合う機会が持てないかという提案もいただいた。例えば、夏休みなどを利用して、図書館で小学生と触れ合うことができないかというものである。

今回は、教員が大学生を引率して、学校の正規の授業が進行している時に交流を行った。しかし、そのためにはフォーマルな手続きが多くあり、企画にもかなりの時間と労力が費やされる。それよりも、比較的日程調整がしやすい夏休み期間を利用すれば、かなりの融通がきくというのである。

さらにコスト面でも、かなりの節約が期待できる。夏休み期間であれば、帰省する学生も多いので、大学側からの交通費支給も軽減されるはずである。

そうしたことも含めた宮古での取組の効果は後にふれる。

Ⅲ. 本プロジェクトの効果の検討

本章では、宮古・八重山地区でのプロジェクトの効果について分析、検証を行う。本分析でいう効果とは、大学教員による公開講座や大学生による交流会、進路相談会等を通じて、対象者である児童・生徒や市民の方々が自身の中で何らかの意識の変化を感じるようになることを意味している。本調査

では、参加者の感想についていくつもの項目を設定しているが、ここではその中でも特に、今回のプロジェクトに参加することで、どれほど大学という存在に関心を示すようになったのかに焦点を当てたい。

なぜ大学への関心に着目するのかと言えば、今日、大学と地域との関わりに着目することは、一つの地域課題としての存在感を増しつつあるといえるからだ。沖縄県の場合、例えば、大学等への進学率に関する課題を指摘することができる。平成22年度の沖縄県の大学等進学率は、公表では36.9%²⁾と算出されており、この値は全国平均の54.3%と比較しても低い数値であることが懸念されている。また、離島地域にとってみれば、沖縄県は数多くの島々を抱える島嶼県であり、そしてまた高等教育機関のほとんどは沖縄本島に集中しているため、地域住民の知の育成においては、地理的な隔たりをどう克服していくのかがいつも問われることになる。

本章では、このような地域課題を抱える沖縄県において、本プロジェクトが、地域の子どもたちや市民らの大学への関心を、どのような形で刺激しうるのか、という問いを立てる。しかし、そのような問いを立てたとしても、実際にどのような分析を行うことができるかは、今回用いた調査票の構成により自ずと制限されざるを得ない。今回の調査設計では、長所として、八重山地域の中学生、市民、宮古地域の中学生、高校生、大学生を対象とするという調査対象の幅広さ、そして実践の多様さを挙げることができるが、それは同時に、分析結果の解釈や地域および地区間の比較をする際に、困難さを生じさせてしまう元となる。また、本分析は効果に着目するとは言いつつも、プロジェクト実施前のデータについて厳密な意味では得られていないため、実際に今回のプロジェクトによる教育効果が出たのかどうかについては、あくまで推測に留まらざるを得ない部分が大きいの。

ただ、このような制約を受けつつも、本分析で用いる沖縄県の離島における生涯学習（教育）実践に関するデータは、一種の希少性を有しているであろうし、また、離島の生徒、市民らが大学というものにどれほどの関心を持つようになるのかについては、本データからある程度知ることが可能と思われる。それゆえに本分析を行うことには十分な意義があると考えられる。

以下の分析では、調査対象に分けて提示する。まず、生徒対象調査（宮古・八重山地域）の分析結果を示し、次いで、市民対象公民館調査（八重山地域）、それから大学生対象調査（宮古地域）について、順々に検討していく。

Ⅲ－１ 生徒対象プロジェクトの効果の検討

(1) 八重山地域中学生対象調査の分析

まず、八重山地域の中学2年生を対象に行われた公開講座の効果に関する調査結果について検討しよう。具体的な手順としては、まず、今回の講座受講の感想および校内成績や進路に関する意識について概観し、次に「大学で学んでみたいという気持ちになった」という項目を用いて、どのような層の生徒が今回の公開講座を通して大学への関心を深めているのか、について検証する。

図1は、今回、A中学校とB中学校において行われた公開講座の感想の各項目と、生徒自身の校内成績および進路について、肯定の回答率を学校別に比較したものである。

公開講座の感想については、各校とも、「琉大で学んでみたい」という項目以外は、おおむね6割を超える肯定的な回答を示しており、ひとまず今回の公開講座には、それなりの効果があったのではないかと推測される。また、グラフ右側の成績・進路についての6項目についてみると、いずれについても有意な差は見られないことから、両校の同質性は比較的高いものと考えることができよう。

次に、大学への関心が、どのような個人的要因によって左右されるのかについて検証する。ここでは、生徒個人の校内成績（「自分の学校成績はよい」）と講座の理解度（「大学の先生の授業は理解できた」）という2つの要因が、大学への関心（「大学で学んでみたいという気持ちになった」）に対して、どのように影響が出ているのかを検証する。分析のために、事前に生徒個人の校内成績と講演内

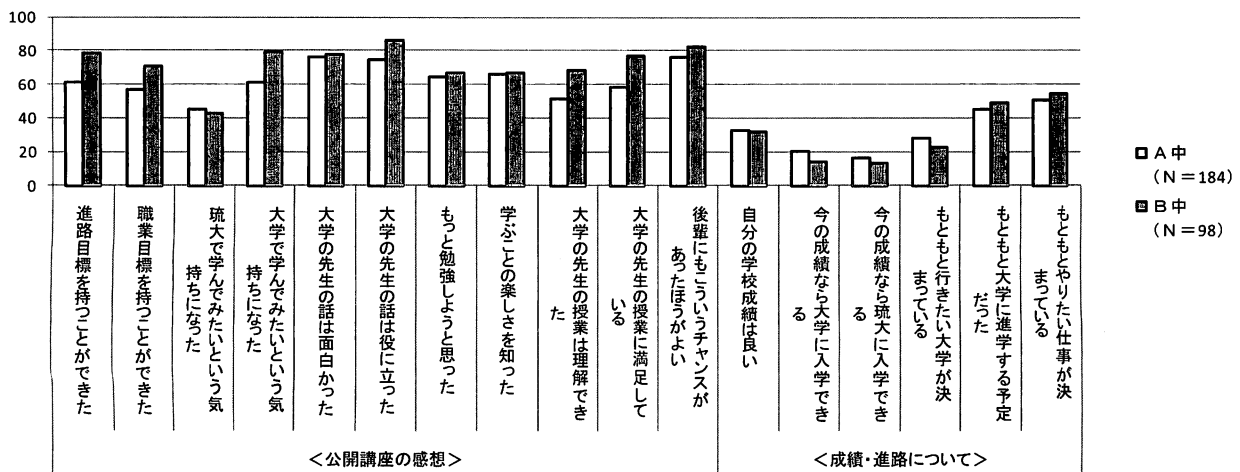


図1 公開講座の感想および成績・進路についての肯定率（八重山、中学校間比較）

容の理解度について、「思う」と「思わない」の回答に応じて高群と低群をそれぞれ設定し、それらを掛け合わせて4群を作成した。そして、この4群を統制変数として、学校と大学への関心の関連性を見るべく、クロス表分析を行った。なお、今回の分析では、もともと大学に進学する予定ではなかった生徒に対象を限定して分析を行っている³⁾。

図2は、上記の分析結果を示したものである⁴⁾。分析に用いることのできたケース数は少ないが、両校では共通して、「成績高・理解度高」群において最も高い値を示し、それに「成績低・理解度高」群が続くという傾向が見られた。このことから、校内での成績と講演内容の理解度は、大学への関心にとって重要な変数であるとみることができよう。

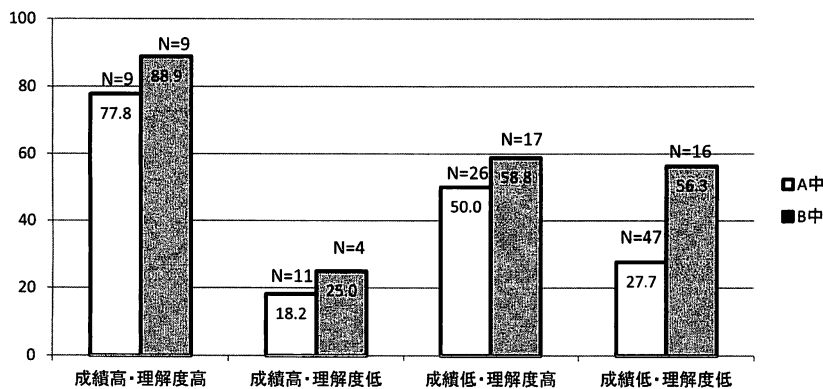


図2 成績・理解度4群×学校×大学への関心（八重山、中学校間比較）

そして、この分析で特に興味深いのは、「成績低・理解度低」群において、A中においては3割の、B中においては5割強の生徒が、大学への関心を見出しているということである⁵⁾。さらに、B中にあつては、その値は「成績低・理解度高」群と同程度の水準である⁶⁾。

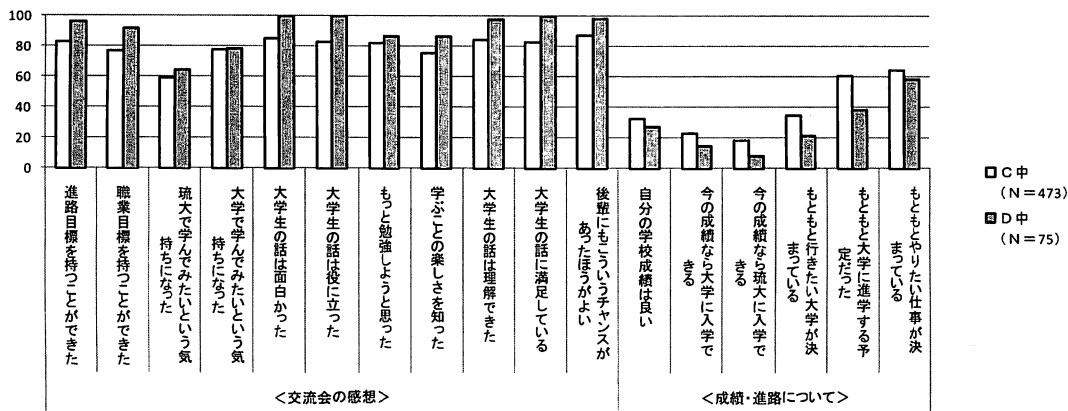
それでは、なぜこのようなことが生じたのであろうか。ここでは次のように解釈する。我々は、成績が低く、理解度も低い生徒については、往々にしてあらゆる教育実践の成果が得られにくいと見なしがちであるが、場合によってはそうはならないことがある。それは、今回の公開講座のように、生徒たちが普段学校では目にすることのない「学校の外」の人物との接触により、その人物やその人物を取り巻く世界に関心を抱く場合である。たとえば、ある日本人中学生がアメリカの大統領と直接面会する場面を想像してみると、その生徒の学校での成績がたとえ低く、また英語が理解できなかった

としても、アメリカ大統領の持つ雰囲気や言外のインパクトから、アメリカという国や、政治というものに関心を抱くことは想定しうることだろう。

つまり、ある生徒の学校適応が遅れ、また講演内容が理解できていない状態にあったとしても、生徒と講演者との関係性によっては、講演者の存在自体が、生徒に対して何がしかのインパクトを与えることが起こりうるということである。これは、心理学分野でいう「光背効果 (halo effect)」⁷⁾に似た現象であるが、光背効果が人物の評価に関するものであるのに対し、この場合は、その人物を通して社会とのつながり（大学への関心！）を看取するようになるといった点で、より社会的な広がりをもつ効果といえる。

(2) 宮古地域中学生対象調査の分析

次に、宮古地域で行われた中学生対象の調査について、分析を行う。ここで調査対象となっているのは、宮古島に位置するC中と、その周辺の島に位置するD中の1～3年生である。前項と同様に、まず、交流会の感想と成績・進路について学校別に見ると、図3に示した結果が得られた。すなわち、交流会の感想の肯定率は、両校において、「琉大で学んでみたい」以外は、約8割から10割と高い数値を示しており、このことから、今回の宮古地域での中学を対象とした取り組みは、強い安定感をもって生徒たちに良い方向で機能したものと考えられる。また、D中においては、進路目標や職業目標、面白かった、役に立った、理解できた、満足しているといった項目でC中より比較的高い肯定率を示しているが、その一方で、成績・進路については、特に「もともと行きたい大学が決まっている」、「もともと進学予定だった」といった項目で、C中より低いという、逆転した関係にあることは注目されよう。これは、D中において、大学という存在が相対的に遠い存在である分、大学生との接触ということが大きな影響力を持ち得た結果であると言えるかもしれない。



しかし、C中とD中との間にそのような違いがあるにもかかわらず、「大学で学んでみたい気持ちになった」という項目については、ほぼ同水準の割合で見出されている。これは、なぜだろうか。図4は、各校の大学への関心を持つ生徒について、大学への進学予定別の全体パーセントを示したものである。図4を見ると、C中では進学予定ありの生徒が全体の56.8%を占めている（大学への関心を持つ生徒の70%強にあたる）のに対し、D中においては、進学予定のない生徒が、進学予定ありの生徒と同程度の、全体の4割（大学への関心を持つ生徒の約50%にあたる）を占めていることがわかる。このことから、D中においては、進学予定なしの生徒の多くが、今回のプロジェクトを通して大学への関心を高めたものと理解されよう。

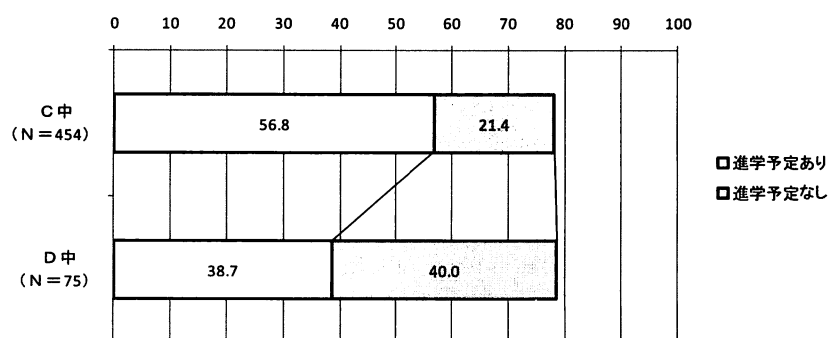


図4 大学への関心の進学予定別の全体パーセント（宮古、中学校間比較）

(3) 宮古地域高校生対象調査の分析

つづいて、宮古地域の高校について分析を行う。本分析の対象となった高校のうち、A高は宮古島に位置し、B高は宮古島周辺の島にある高校である（1、2年生対象）。図5は、これまでの分析と同様、両高校の交流・相談会の感想および成績・進路について示したものである。まず、感想については、前項の中学の場合と比較して、A高が6～7割台の水準へとやや下がる項目があるものの、全体的にみれば、「琉大で学んでみたいという気持ちになった」という項目を除き、軒並み過半数を超える多くの生徒が、今回のプロジェクトに対して高い肯定的な感想を示している。ゆえに、高校において本プロジェクトは、一定の効果をもたらしたものと推測される。また、前項の中学校の分析で見られた感想と成績・進路面の逆転現象は、高校の場合、よりいっそう見えやすくなっている。なお、高校の場合、「大学で学んでみたいという気持ちになった」はA校で高く（5％水準で有意）、この点は、中学校とは異なる点として挙げられる。

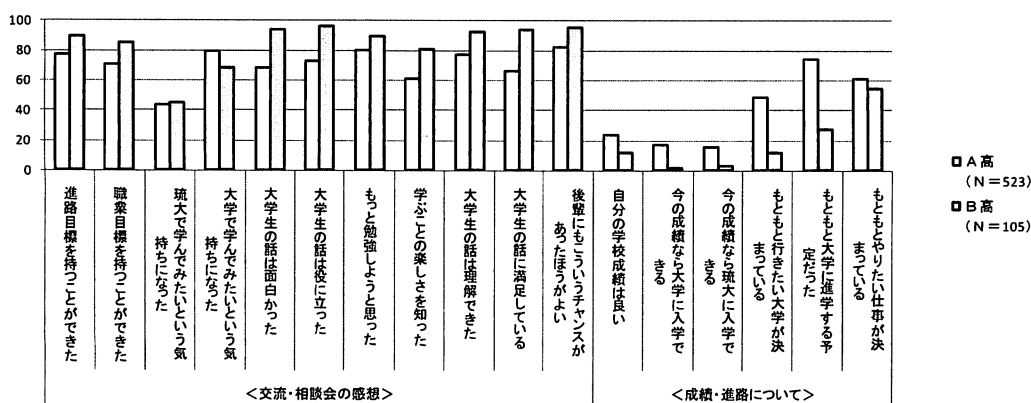


図5 交流・相談会の感想および成績・進路についての肯定率（宮古、高校間比較）

それでは、ここで、「大学で学んでみたいという気持ちになった」という大学への関心を持つのは誰なのかということについて、やはり同様に、大学進学への希望の有無に着目して分析を行う。図6は、学校ごとに大学への関心を抱いた生徒について、進学予定別の全体パーセントの値を示したものである。これを見ると、A高においては、大学への関心を持った進学予定の生徒は全体の67.6%（大学への関心を持つ生徒の約85%）で、進学予定でない生徒は全体の11.5%にしか達していないが、それに対しB高では、進学予定のない生徒が全体の41.2%（大学への関心を持つ生徒の約60.0%）を占め、進学予定のある生徒の数よりその比重は大きい。この結果を見ると、A高においては、中学時点よりも進路決定の意志がよりはっきりとしてきたために、大学への関心を持つ者の大半が進学予定の

生徒に固定化されつつあることの表れとして捉えることができる。B校に関しては、依然として多くの進学予定のない生徒が、大学への関心の大部分を占め、いわば宙ぶらりんの大学への関心が見てとれる。これは、今回のような離島支援プロジェクトで、大学への関心をただの関心で終わらせるのではなく、いかにして具現化することが可能なのかという長期的な視野に基づいて考える必要があることを気づかせる結果ではなかろうか。

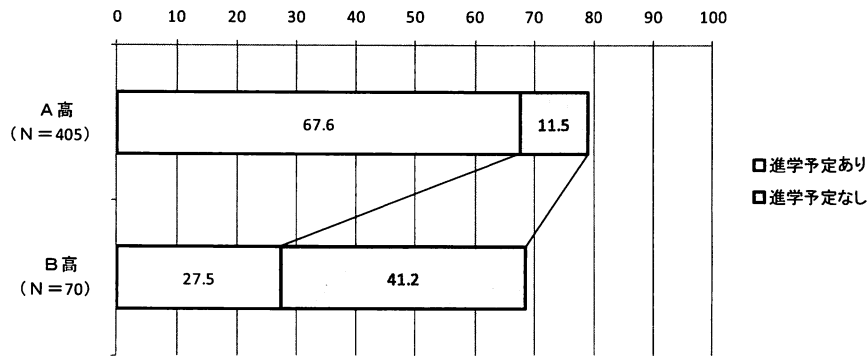


図 6 大学への関心の進学予定別の全体パーセント（宮古、高校間比較）

Ⅲ－２ 公民館における公開講座に関する市民対象調査の分析（八重山）

次に、八重山の 2 つの字で行われた市民向けの公開講座の調査結果について分析を加える。ここでは、まず公開講座の満足度、参加の動機について、単純集計によって概観する。そして、次に、参加者の自由記述式の回答を踏まえ、今回の公開講座が具体的にどのように評価され、そしてまた今回のような取り組みに対して市民がどのような不満や期待、そして展望を寄せているのかについて、より詳細に分析を行う。これらの分析により、離島における公開講座の意義、そして大学と離島との関係が現状ではどうなっており、将来的にどうあるべきかという観点が得られるであろう。なお、今回の調査データの年齢構成は、60代以上が71.3%、30～40代が16.3%、10～20代が12.5%、性別構成は、男性が60.5%、女性が39.5%となっている。

図 7 は、2 つの字の公民館で行われた公開講座の満足度、および参加動機の肯定率を示したものである。この結果を見てみると、満足度については、両公民館で90%を超える高い値を示しており、今回の公開講座の効果が確認されよう。次に、参加動機についてみてみると、講座内容に関するものでは、「学ぶ楽しさを得る」、「教養を高める」、「生活の役に立ちそう」が9割前後、もしくは10割に達する場合が見てとれるが、「仕事の役に立ちそう」という項目については、対象者の46.5%が無職ということもあって、相対的にやや低い数値となっている。また、非内容的な参加動機として、講師が「字の出身」、「八重山の出身」であることは、共に8割を超えており、参加者は講演者の出身地域にまで気を配っていることがわかる。なお、「友人・知人」というネットワークを通じての参加は、C 公民館で8割に達しているのに対し、D 地区では6割に達しておらず、唯一顕著な差が見られた。

上述のように、今回の公開講座の満足度についてはきわめて高い数値が示されたが、しかし、その具体的内実については、この数値からだけでは把握しきれない。そこで、ここでは調査票の自由回答欄への記述から、大学が市民を対象に行った公開講座が、具体的にどのような実感を伴って捉えられたのかについて迫る。分析に先立って、まず注目されるのは、自由記述欄の回答率である。今回の調査では、回収した調査票全体の45%という、多くの参加者の方々に自由記述欄を記入していただくことができた⁸⁾。これは、もちろんそのための時間を十分にとることができたということも考えられるが、今回のような地域と密接なつながりをもった事業の一つの特徴ともいえるかもしれない。

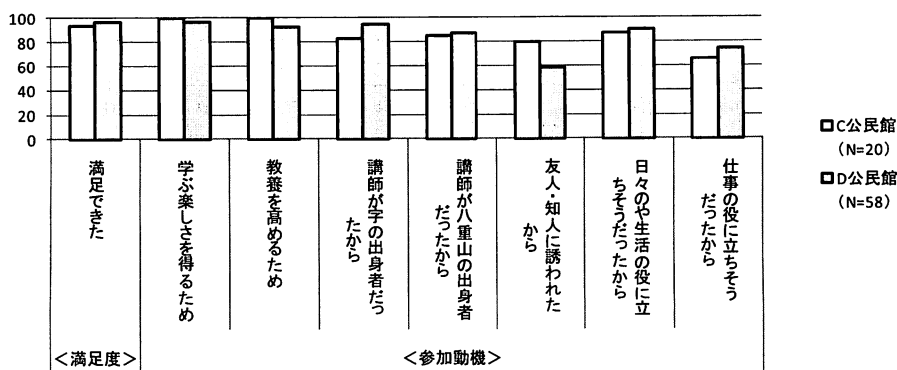


図7 公開講座の満足度と参加動機（八重山地域、公民館対象）

分析の手続きとしては、まず、各自由回答について類似した内容について小分類としてまとめ、それをさらに大分類として3つに類別した。その際、同一人物の記述であっても、内容が異なればそれを1カウントとして数え、同じ分類に入る場合は複数カウントはしなかった。その結果、表4に示すように、大分類として、公開講座への肯定的感想、公開講座への難点の指摘、今後の公開講座の方向性、といったカテゴリーを設けた。

まず、肯定的感想について見ると、もっとも頻度が高いのは、全般的な好感で、それに精神的刺激、今後の参加意志、他者への伝達と続いている。この肯定的感想だけで、全体の約半数を占めることから、やはり自由回答からみても、今回のプロジェクトは、受講者にとって手応えのあるものだったと考えられる。

次に、難点への指摘という欄について検討しよう。ここで最も多く挙げられている小分類項目は、時間の不足ということである。「しり切れトンボになって残念」とあるように、せっかく良い講座を提供できていても、時間の配分がうまくコントロールできていなければ、受講者への効果を満たすことができないのは明白であろう。そしてこれは、内容の密度や多様性という問題とも強く関連する問題である。また、時間の不足の次に多く挙げられているのは、理解度の問題である。たとえば八重山地域での知のふるさと納税は、大学教員が登壇し、講演を行うものであったが、その内容は専門的であるがゆえに受講者を置き去りにしてしまうという懸念がある。専門的な内容を分かりやすく噛み砕き、説明する姿勢が求められていると言えよう。

今後の方向性については、テーマ内容についての要望は、生涯学習の意義を認識している市民が多いからか、かなり具体的な内容に踏み込んだものが数多くあった。また、今回のような講座を「定期的に」やっていただきたいという継続性の確保や、「できるだけ機会を作って欲しい」という頻度の向上に関する意見が数多く寄せられていたことは興味深い。これは、離島という地域性の問題、すなわち離島の学習機会の少なさという現状から来ている要望と認識することができる。このように、離島で大学人、知識人が講演を行うことの意義を強く感じているということは、それゆえ内容の充実、方法の適正さの確保がいっそう強く求められることになるだろう。

表4 自由記述回答の分類表

大分類	小分類	具体的なフレーズ	度数
肯定的感想	全般的な好感	良かった (60代男性A)／ありがとうございます (60代女性A_2)／ぎもんを持ち、つききゆうすることは、よいこと (70代女性A)／すばらしいおはなし (70代A)／非常に良かった (20代男性B_1)／いい話でした…ありがとうございました (20代男性B_2)／たいへんうれしく思います (50代男性B_3)／感謝します (60代男性B_5)／楽しかった (20代女性B_1)／とても楽しかった…ありがとうございました (20代女性B_2)／おもしろかった (20代女性B_3)／とても充実 (30代女性B_1)／とてもいい…ありがとうございました (50代女性B_1)／おもしろかった (50代女性B_2)／楽しい、意義ある話 (60代女性B_2)／大変すばらしい講演…ありがとうございました (60代女性B_3)／とてもよかった (70代女性B_1)	17
	精神的刺激	正に知のふるさと納税 (60代男性A)／わかっているようでわからなかった、目からうろこ、びっくり、ほんとうに考えさせられる、再確認した、先生がおっしゃるように…になりたいですね、いろいろ勉強に (60代女性A_2)／もっとじかんかけてベンキョウしたい (70代A)／自分も頑張ろうという気持ち (20代男性B_1)／ためになりました (20代男性B_2)／不思議な話 (50代男性B_2)／やりたいことはたくさんある、人生の主役となって人生たのしくすごしたい (60代男性B_4)／自分の人生がんばります (20代女性B_3)／元気づけられる (30代女性B_1)／身近の話を聞く機会に (50代女性B_1)／感動しました (60代女性B_1)／後輩に大変勉強になり、若者にも為になった事と思う (60代女性B_3)	12
	他者への伝達	小学生等にも聞かせてあげたい、しっかり伝えないといけない (60代女性A_2)／子供達と一緒に聞ければもっと良い (40代男性B)／高校生に聞かせてもらいたい (70代男性B_3)	3
	今後の参加意志	これからもお話が聞けたら (60代男性B_5)／楽しみにしております、次回も参加したいです (60代男性B_7)／次回お聞きしたい (70代男性B_1)／何ん回でも聞きたい (70代男性B_3)／農業していても行きます (70代男性B_5)／今後も実施されれば、参加したい (20代女性B_2)／今後も…聞けたらうれしいです (60代女性B_2)	7
難点の指摘	理解度の問題	わからない、理解まで行かない (70代女性A)／むづかしく、分りにくかった (50代男性B_2)／学生向けの講義方式は地域の方に難しすぎる (70代男性B_2)／非常にきょうみはあったが、今回難かった (70代男性B_3)／もう少し言葉 (説明) がわかりやすいとよかった。例とか (20代女性B_3)	5
	時間の不足	講演時間が短い (60代女性A_1)／もう少し時間があって…もっと聞きたかった (60代女性A_2)／もう少し聞きたかった (40代女性B)／もっと聞きたかった (50代女性B_2)／もう少し聞きたかった…時間があれば詳しく聞きたい (50代B)／もっと先輩の生の話を聞きたい…時間が短く、しり切れトンボになって残念 (60代女性B_1)	6
	話題の密度	一本の演題で詳しく聴講できたら (50代男性B_1)／…内容をたっぷりはなして下さったら興味深かった (70代男性B_2)／お一人一つの講座の方がよい (60代女性A_1)	3
	話題の多様性	もう少しいろんな話を聞きたかった (60代女性B_1)	1
今後の方向性	継続性の確保	今後も積極的に展開して頂きたい (A)／大いに歓迎、今後とも期待 (70代男性A)／半年に一度位 (60代男性B_3)／定期的に (60代男性B_7)／機会があれば、又是非来て下さい (40代女性B)／又近いうちに講座をもって下さい (60代女性A_2)	6
	頻度の向上	増していってほしい (20代男性B_1)／数多く聞きかきがあれば良い (40代男性B)／このような企画はなかなかありませんので、できるだけ機会を作って欲しい (60代男性B_1)／度々やってもらったらと希望します (60代男性B_6)	4
	テーマ内容	各分野の先生方のご指導を (A)／特定しなくとも幅広く (教養的分野も) (70代男性A)／長寿、健康 (栄養、運動、睡眠等) の講演 (60代男性B_2)／今後とも出身者だけに限らず (60代男性B_6)／津波石について…次回お聞きしたい (70代男性B_1)／身近に役立つ課題を (70代男性B_6)／宇宙の話、専門分野 (50代女性B_2)	7
	地域性	地域での講座を (40代男性B)／離島に大学がなく、学習機会が少ないので離島への出前講座等を開催してほしい…地域住民にも大学機関が身近な存在になる (50代男性B_1)／離島のハンディをなくす為にも宜しくお願いします。知識が豊かになることが人生の幸につながりますので (50代男性B_3)／B (地区名) に住み…B出身の琉大の教授の話が聞けることは大事 (60代男性B_5)／沖縄全体 (離島県) を均等にゆきわたるよう実施してもらいたい (70代男性B_4)	5
	経済面	少しの金額なら払ってもよい (70代女性A)／有料でもいい…はじめは無料で周知されてきた段階で有料 (30代女性B_1)	2
	時間帯への配慮	青年会や婦人会は夜間設定されれば参加者はふえる、年配中心の学習は昼1～5時頃を (A)／夜の日程で (60代男性B_7)	2
合計 (延べ数)			80

※ () 内は年齢 (年代)、性別、公民館名、識別番号 (複数該当の場合のみ) の順で記載。記載がない場合は不明を指す。「70代」は「70代以上」を示す。

Ⅲ－３ 宮古での取組の効果～大学生の変化

上述したように、宮古での取組は小学生にとってのよい刺激となることを狙っている。将来展望が広がり、目標を持つことができ、将来の進学アスピレーションを高める結果となることが期待される。結果として大学進学率が高まれば、高大連携の視点から見れば成功と言える。結果的に琉大を含む大学に進学しなくてもそれはそれでよい。重要なのは選択肢をできるだけ多く持つということである。

しかしよい刺激を受けるのは小学生ばかりではない。大学生もまたよい刺激を受けることだろう。最後に取組の効果として、大学生側の効果に注目したい。

参加した大学生には「離島支援プロジェクトについてのアンケート」と称した質問紙調査を実施した。有効回収数は7なので、統計分析をするほどのサンプル数ではないが、全体的な傾向を見ていきたい。

まず質問の中に、将来、出身地である宮古に住みたいかどうか、宮古で働きたいかどうかを尋ねたものがある。具体的には「自分はもともと将来宮古に住むつもりだった」「(本プロジェクトに参加して) 将来、宮古に住みたいという気持ちになった」、「自分はもともと将来宮古で働くつもりだった」「(本プロジェクトに参加して) 将来、宮古で働きたいという気持ちになった」という質問項目である。これを4件法、4点満点で測定した。

この四つの項目のうち、「自分はもともと将来宮古に住むつもりだった」「(本プロジェクトに参加して) 将来、宮古に住みたいという気持ちになった」を「将来宮古に住みたい」(事前・事後)、「自分はもともと将来宮古で働くつもりだった」「(本プロジェクトに参加して) 将来、宮古で働きたいという気持ちになった」を「将来宮古で働きたい」(事前・事後)として変化について比較を行った。

図8のグラフからわかるように、本プロジェクトに参加する前と後では、学生の意識に明らかな違いが見られる。事前と事後では、「将来宮古に住みたい」「将来宮古で働きたい」の4点満点の得点が、事後の方が高くなっているのである。サンプル数が少ないが、統計学的に有意な結果である(t検定の結果1%水準で有意)。

行政にとって、若者が故郷に戻ってくるかどうかということは死活問題である。しかし、本取組を通して、最初は宮古に戻るつもりがなかった学生も、子どもと触れ合うことにより、改めて故郷の良さを知り、戻って仕事をしようという気持ちになったということである。例えば、教員になって宮古に戻ってくるというパターンがわかりやすいだろう。この意味で、大学生も故郷の子どもたちと触れ合うことにより、刺激を受けていると言える。

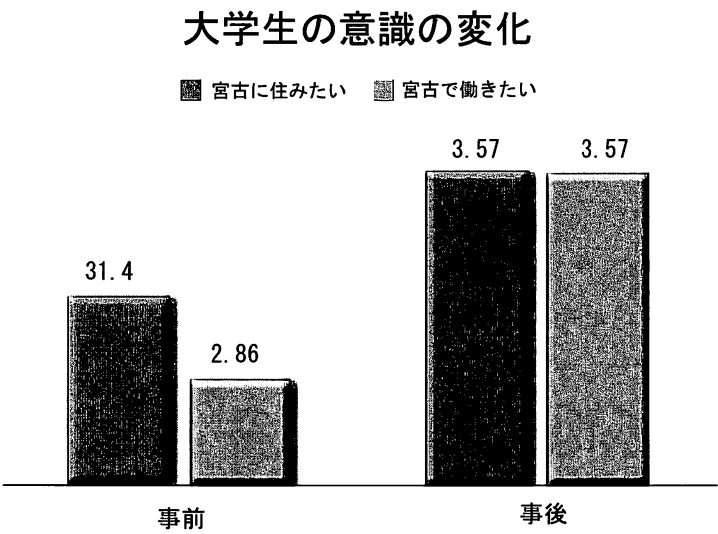


図8 大学生の意識の変化（宮古地域、大学生対象）

その他の質問項目についても、本プロジェクトの成果がうかがえる。「将来の進路について目標を持つことができた」では、「ややそう思う」(28.6%) + 「とてもそう思う」(71.4%) = 「そう思う」(100%) となっており、否定的な回答は見受けられなかった。また、「将来の職業について目標を持つことができた」については、「ややそう思う」(28.6%) + 「とてもそう思う」(71.4%) = 「そう思う」(100%)、「本プロジェクトに参加してやりがいを感じた」では「とてもそう思う」が100%、「来年も本プロジェクトに参加したい」で「とてもそう思う」が100%、「来年以降も本プロジェクトを継続してほしい」で「とてもそう思う」が100%と、参加学生からの評価は高い。

学校現場からの期待の高さも考慮すると、学生、児童・生徒の双方にとって有益なこの取組は継続していくことが望ましいと思われる。

IV. 結論と今後の展望・課題

以上、本稿では離島支援プロジェクト「知のふるさと納税」を概観し、質問紙調査によって得られたデータを元にいくつかの分析結果を示してきた。知見としては、ひとまず以下の4点を挙げておきたい。

①中学生対象八重山プロジェクトでは、総じて高評価が得られている。生徒の大学への関心を高めるうえでは、校内成績および講座の理解度、そして生徒と講演者の関係性が重要な要因となる。

②宮古プロジェクトでは、おおむね高い評価が得られている。大学への関心について、進学予定の生徒が多い学校では、主に進学予定の生徒が大学への関心を見出しており、進学予定の少ない学校では、進学予定でない生徒の多くが大学への関心を見出していた。また、この背後には離島間の格差の影響が見られた。

③公民館における八重山プロジェクトでは、公開講座を受講した市民の多くは高い満足度を示していたが、その中には離島における学習機会の少なさを認識する者もあり、それゆえに、講座内容の充実と方法の適正さがいっそう求められる。

④大学生は出身地域への活動に取り組むことで、出身地域への魅力を増していた。

これらのことから、本プロジェクトは対象者および実施協力者に対して、意義のある様々な効果をもたらしているものと考えられる。しかし、各分析結果が示してきたように、それぞれのなかに固有の課題群が備わっていることも指摘しておきたい。これらの課題を認識するならば、ワンショットのプロジェクトとしてではなく、長期的なスパンを通して関わることの必要性に気づくだろう。というのも、大学への関心を促すことに成功したことはよいとしても、離島における現状の環境を鑑みれば、その火をいかに絶やさず維持できるかが問われていると考えられるからである。それには、財政的な援助が必要であろうし、そもそもの前提として、離島地域の課題を大学が課題として強く認識する必要がある。その際、今回の分析はいくつかの視点を提供したという点で意義のあるものと言えるだろう。

本論の最後に、今後の課題と展望について指摘しておきたい。本分析では、調査設計の限界から、教育効果を測定するという点では、推測に留まる部分が多く含まれていた。今後は、条件統制を整えたうえで、生涯学習（教育）実践の教育効果をより適切に導き出す方向で取り組まれることが求められよう。また、同じ離島であってもそれぞれの離島（諸島）内での相違も予想される。このような分析視角を持って取り組むことは、よりよい離島支援への一つのステップとなると考えられる。

次年度以降も、このような離島支援プロジェクトを継続して展開し、地域への貢献に資する成果を更に挙げていくことを期待し、本論を終える。

【註】

- 1) 実際には学生のほかに、教員が引率という形で同行している。
- 2) ここで使用しているデータは、「沖縄県統計資料 WEB サイト」の平成22年度学校基本調査のページから入手した (http://www.pref.okinawa.jp/toukeika/school/2010/kakuhou/gaiyou/high_gradu.pdf)。なお、この数値は進学率算出の際、分母を高校卒業者数で捉えたものであるが、18歳人口基準（3年前の中学卒業者数）を分母として算出すると、その数値は31.6%となり、約5ポイントほど落ち込む。
- 3) もともと大学への進学を選択肢として持っていれば、当然、大学で学んでみたいとは当然のことであろう。実際に、大学への進学予定と大学への関心をクロス集計にかけると、両中学校とも、大学に進学予定である生徒の9割前後が大学で学んでみたいと回答している（表は省略）。
- 4) 図2のNは、各群全体のケース数であることに注意されたい。
- 5) 同時に、A中とB中の差についても見逃してはならないだろう。「成績低・理解度高」群においては、カイ二乗検定の結果、5%水準で有意であった。（表は省略）
- 6) 「成績高・理解度低」群については、ケース数がきわめて少数であることから、ここでは言及しない。
- 7) 光背効果の定義は、「他者がある側面で望ましい（もしくは望ましくない）特徴をもっていると、その評価を当該人物に対する全体的評価まで広げてしまう傾向」とされる（中島義明ら編『心理学辞典』1999. 有斐閣より）。
- 8) しかし、公民館別にみると、大きな差がある。B公民館では、50.8%に達した（N=31）一方、A公民館では26.3%であった（N=5）。

【参考文献】

岩永雅也『生涯学習論—生涯学習社会の展望—』、放送大学教育振興会、2002

小林雅之『進学格差』、ちくま新書、2009

神部純一「生涯学習社会における大学公開講座の意味」（『日本生涯教育学会年報』27、2006、117-124頁）

西本裕輝「沖縄の低学力問題に関する実証的研究（2）」（『琉球大学法文学部人間科学科紀要 人間科学』21、2008、182-221頁）

謝辞：本プロジェクトの講師を務めていただいた山口喜七郎氏、東盛良夫氏、資料を提供していただいた琉球大学学術国際部地域連携推進課の玉城優里氏、宮古・八重山地域の学校の先生方、八重山地域の公民館職員の方々、調査にご協力いただいた児童・生徒、参加者、大学生の方々、その他多くの細かな調査をしていただいた関係者の方々に、この場を借りて深く感謝申し上げます。